

〈追悼文〉 中本イズムよ永遠なれ

橋尾, 直和

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

1995-02-24

中本イズムよ永遠なれ

橋 尾 直 和

中本正智先生は、常日ごろ言語調査を行うには、まずその土地へ出向いて現地の人と話し、その言語環境をつぶさに観察すべきで、調査を本格的にするのはその次である、とおっしゃっていた。現地に赴けば、その土地のことばを育んだ風土、地理的状况がつぶさに感じとれるからだ。先生は、言語環境の把握ぬきの調査については、特に戒めておられた。

また、先生はその土地の言語を知るには、文献学的な考察だけでは限界があり、日本語の歴史を解明するには、全国の方言音声を自分の耳で聞き、肌で感じとる必要があることを力説されてきた。それも、自分一人の耳ですべてを聞き収集することができれば、精密度が増すし、比較する際にも安心して作業ができるはずである。この鳥敢図的な発想こそが、中本イズムの本流であると言える。

先生がたどってこられた道のりは、まさに列島言語史を肌で感じ取ろうとされた意気込みであったに他ならない。『琉球方言の総合的研究』をはじめ、『琉球方言音韻の研究』、『図説琉球語辞典』に至るまで、その方言資料は、まさにご自身が現地にまで足を運び、地道に資料を収集されたものであった。

私と先生との出会いは、私がまだ鳴門教育大学大学院の修士2年だった頃、鹿児島大学で開催された日本方言研究会で、奄美徳之島方言の音響分析に関する発表を行った時である。私の発表の際に司会をされていたのが、先生であった。ここで知り合ったのが縁で、東京都立大学大学院に進学することになった。研究者としての道が開かれたのは、まさにこの時であった。

恩師——このことばが中本先生にはピッタリと当てはまる。先生は、言語学者つまり研究者であるとともに、優れた教育者でもあり人格者でもあったと言える。その人を包み込むようなお人柄に、私は随分と支えられてきた。反面、先生には叱咤激励される場面が多かった。今となっては、この教育的配慮に大変感謝している。

さて、中本先生とおつき合いは、学校内のみではなかった。博士課程進学と同時に、新宿西にある東京言語研究所（ラボ国際交流研究センター）の理論言語学講座をすすめられて受講することとなった。先生が担当されていた「言語地理学」にも出ることになり、帰り道が同じであったこともあって、新宿・池袋でお酒のおつき合いをさせていただいた。

言語学に関することや、ドイツ・オーストラリア・中国に滞在された時の思い出話、人生論など、さまざまな分野にわたってのお話を聞くことができた。時には、私の東京での生活

のつらかったことや恋愛などに関する人生相談にも応じて下さったりした。また、研究などやめてしまおうと思った時があり、そのことを中本先生にぶつけてみたこともあった。先生は、それを包み込むようにして受けとめられ、適切なアドバイスをして下さった。私が精神面で強くなれたのも、先生のおかげである。

私が助手として東京都立大学に勤めるようになった直前だと思うが、東京言語研究所から帰る途中、池袋の居酒屋で先生が、「橋尾、私の弟子になりなさい」とおっしゃられた。最初、私は指導教官とその教え子は、自然と師弟の関係が成立しているものだと思っていた。改めて先生にこう言われて、一瞬とまどった。少したって、嬉しさが心の底からこみ上げてきた。あれだけ先生に怒鳴られていた私が、先生に弟子として正式に認められたのである。興奮せずにはいられなかった。

かくして私は、中本先生の愛弟子となった。しかし、与えられた使命感たるや、ものすごい重圧となって肩にのしかかってきた。中本先生のこれまで成し遂げられた数々の業績に対するプレッシャーと、先生の名前を汚してはならないというプレッシャーとが同時に押し寄せてきたからである。

中本先生は、博士論文『日本列島言語史の研究』を刊行された時、私に言われたことばは、今でも強烈な印象として心にとどまっている。「橋尾、この論文は私がやろうとしている仕事の序文にしか過ぎないんだよ」——このことばを聞いた時、私は愕然とした。その人の集大成に対して与えられる（文学博士の現状は少なくともこのようである）感の強い博士論文が、まだほんの序論にしか過ぎないんだなんて。私は、ただそのスケールの大きさに、圧倒されるだけであった。

先生の頭に描かれていた構想とは、まだ誰もやろうとしなかった「アジア言語地図」の完成にあった。日本のある地域の言語のみを対象とするのではなく、資料は精密にそして全体を大きく見わたす、そんな超越した見方を先生はお持ちであった。日本列島言語史の次は、アジア言語史である。こう言いきれぬ先生を、私は尊敬せずにはいられなかった。

アジアにおける日本語・琉球語・アイヌ語——このテーマを思いつくようになったのも、中本先生のおかげだと思っている。そのためには、アジアの国々を自分で歩かなくてはダメである。その国々の人々と直に接し、ことばを交わし、言語環境を肌で感じ取る。そう、これこそが中本イズムなのである。これは、文献のみを対象としている研究にはできないことである。

私は、この中本イズムの継承者になりたい。これは、本心である。近ごろ、この中本イズムを忘れたのか、自分の耳で、自分の足で調査をやらない輩が増えてきたようである。教え子に調査をやらせ、自分は適当に調査をやり、最後は「——編」で自分の名前を付けて本を刊行する。これは、中本イズムの本流に反するのではないか。このようなやり方に対して、中本先生はきっと天国でお嘆きになっていらっしやると思う。

中本先生と調査を共にしたのは、宮古島と伊良部島へのイントネーション調査、沖縄県浦添市小湾方言のアクセント・語彙調査、そして能登半島のイントネーション調査である。中国南部の言語調査から戻られて直ぐに行った能登方言調査が、中本先生最後のフィールドワークとなってしまった。先生は、この直後に入院された。

今思えば、先生は能登行きを、体調を崩すのを覚悟で強行されたのであろう。この時、かなり足元がふらつかれていたのを記憶している。入院されてから、何度もお見舞いに病院を訪れた。先生がいらっしゃれば、もう少しいろいろとアドバイスを受けることができ、早く解決できるのに、と思うことしきりであった。

先生が病院からご自宅に移られてからも、埼玉県上福岡のご自宅へお見舞いに幾度も通った。「先生、早く元気になって下さい」——このことばを何度も繰り返した。しかし、この願いもむなしく、先生は天国へ赴かれた。

私の就職が決まり、高知へ赴任することとなったのは、先生が自宅療養に切り替えられてからのことである。そして、昨年9月、最後のお別れにご自宅を訪れた時、先生は「橋尾君、よかったね」と細い声でおっしゃられた。複雑な心境であった。私がもう少し東京にいることができたなら、先生も心強かったであろうに。しかし、きちんと就職がきまることで先生を安心させることができ、恩に報いることができるならば、と思い高知女子大学への就職に踏み切ったのであった。

私が今こうして、大学の助教授として研究そして教育の道に進むことができたのも、すべて中本先生のおかげだと言っても過言ではない。先生が私を東京都立大学へ引っぱって下さり、研究者としての道へ導いて下さったことに本当に感謝している。中本先生、いつまでもいつまでも、天国から見守っていて下さい。先生のような、誰からも愛される研究者、教育者として頑張りたい。また、人に調査をやらせ、自分の名前をつけて本を刊行するようなことは絶対にしないよう、先生を見習って行きたい。そして、先生のやり残された「アジア言語地図」の構想をできるだけ実現できるよう、努力したいと思う。

中本イズム永遠なれ!!

(高知女子大学助教授)

[1994年8月22日 西表島祖納の民宿にて.]